

幕末明治の写真師列伝 第八十二回 宮下欽 その四

慶応2年12月25日(1867年1月30日)、孝明天皇が崩御して、翌慶応3年正月9日(1867年2月13日)、明治天皇が満14歳で踐祚の儀を行い皇位につく。そして、第二次長州征伐最中の慶応3年7月20日(1866年8月29日)、ついに將軍・家茂が大坂城で薨去する。一橋慶喜は朝廷に運動してすぐに休戦の詔勅を引き出し、会津藩や朝廷上層部の反対を押し切る形で休戦協定の締結に成功する。

慶喜は同年7月27日(1867年8月26日)に宗家相続を承認した後、12月5日(1867年12月30日)、將軍宣下を受けついに第十五代將軍職の座に就くこととなった。その後、慶喜は会津藩、桑名藩などの支持の下、朝廷との密接な連携を図り、慶応の幕政改革を行う。慶喜は当時の朝廷に行政能力が無いと判断して、列侯会議を主導する形での徳川政権存続を模索していた。しかし緊迫する政治情勢下で内乱の発生を深く懸念して、ついに慶応3年10月14日(1867年11月9日)、大政奉還を決定する。

大政奉還後の政治体制については諸侯会議によって定められるはずであったが、同年12月9日(1868年1月3日)、薩摩藩らは政変を起こし朝廷制王、徳川慶喜を排除して新政府樹立を宣言(王政復古)する。会議において慶喜の辞官納地(内大臣の辞職と幕府領の奉納)が決定する。

慶応4年1月3日(1868年1月27日)、京都の南郊外の鳥羽および伏見において、薩摩藩、長州藩などによって構成された新政府軍と旧幕府軍は戦闘状態となり、ここに鳥羽・伏見の戦いが開始された。鳥羽・伏見の戦いは新政府軍の勝利となり、慶喜は大坂城を脱出し、幕府軍艦で江戸に逃げ帰る。

松代藩京都留守居役、長谷川昭道は直ちに江戸に向かい、当時江戸に居た藩主・真田幸民、松代藩執政・真田志摩、高野真遜らの重臣たちにこの状況を詳細に報告する。こうした松代藩に対して、幕府老中・小笠原老岐守の家老・多賀長兵衛や長岡藩家老・河井継之助などが執拗に佐幕派として留まるように説得するも、松代藩執政・真田志摩は「慶喜、恭順罪を謝せざる可からざるに到って朝廷を憚らず不軌の暴挙を起こさんとするならば、我が藩期して覚悟あり」としてこれらの呼びかけを拒絶した。

このような状況で、慶応4年1月19日(1868年2月20日)、藩主・真田幸民は徳川慶喜より甲府城代を命じられる。これに対してもすでに大政奉還もされて、朝敵となった慶喜の命には従えないとして、松代藩執政・真田志摩から陳述させてこの命を取り消させている。

一方、慶応4年2月4日(1868年2月26日)、太政官より藩主・真田幸民に対して、朝敵討伐の準備をするように命じられた。さらに同年2月8日(1868年3月1日)には、太政官より藩主・真田幸民を信濃十一藩の触頭にすると命じられた。この触頭というのは、信濃十一藩の総大将、総連絡責任者、信濃十一藩のまとめ役という意味であった。東海、信越の各藩の去就については、早くから勤皇派として加担していた尾張徳川藩が名古屋城に各藩の重役を呼び出して、各藩に対してその去就についての回答を求めている。松代藩は同年2月12日(1868年3月5日)、尾張藩主徳川慶勝よりの使者、遠山彦四郎を迎

え、名古屋への重臣の差し出しを求められる。このため、松代藩では家老の河原左京、郡奉行・岡野弥右衛門、目付役・近藤民之助らが急いで名古屋へ行き、直ちに藩主重臣連署の請け書(正月9日付)を提出した。これにより松代藩は藩兵の出兵がいつ命じられてもいいようにと、兵員の編成、隊長、参謀などの人選や、弾薬、兵糧などの後方関係の準備が急いで行われた。同年2月21日(1868年3月14日)、藩主・真田幸民は慶喜が上野東叡山寛永寺で謹慎することを見届けて、松代へ帰国する。その際に一部の藩士を残して、その他の夫人、母堂など江戸屋敷に居た全員も松代へ帰ることとなった。

慶応4年2月30日(1868年3月23日)、東山道先鋒総督より東山道軍が会津征伐のため移動することになるため、松代藩が甲府城を守るように命じられる。松代藩はただちに甲府出兵部隊796名を編成し、慶応4年3月3日(1868年3月26日)に松代を出発、6日(1868年3月29日)早朝に甲府へ到着して、甲府城へ入城した。この甲府出兵部隊の大砲司令として、宮下欽次郎の兄、大島直之進も参加している。

その後、同年3月15日(1868年4月7日)、北越出征の準備のため一部の小荷駄部隊と警備部隊だけ(183名)を残して、松代に帰藩した。甲府城警備には松代藩の他に犬山藩、岩村藩、高須藩、大垣藩、高遠藩、飯田藩、沼津藩が各一小隊、高島藩、浜松藩が各二小队、肥後藩が三小队配備されていた。すると、幕府脱走の古屋作左衛門ら衝鋒隊が長岡藩、新発田藩、高田藩、与板藩の各藩を遊説して、佐幕への協力を求めて動いているという情報が入った。与板藩は、700名の兵を率いる衝鋒隊に恐れをなして、衝鋒隊の要求を呑んで軍資金一万両を差し出している。衝鋒隊は越後路を南下して北越の高田に行く。高田藩はまだその時は藩論が統一されておらず、お家第一主義の線で衝鋒隊と交渉が行われて、一応は衝鋒隊に協力する態度を示していた。それでいて衝鋒隊を高田藩城下には宿営させずに、隣の新井宿が信州を攻める際に都合がいい場所であるとして、そちらへ宿営させることに成功した。また高田藩は衝鋒隊を厚遇して、物資の補給や休息などもさせたので、衝鋒隊の古屋などは高田藩から強力な後援を得ていると誤解していた。そこで衝鋒隊は信州へ進出、飯山藩攻撃の準備に入った。

このような情勢に対して、松代藩は自領の警備のため、草津街道などの要地や街道口、渡川口などの関門へ守兵を配置し、新井、高田方面などへ間諜を派遣して、さらに周辺の情報を収集した。領地内の警備体制を終えた松代藩は飯山藩救援のために北征軍を編成し、出発させることにする。この時の北征軍は、総括隊長に河原左京、副隊長に小幡内膳、参謀兼軍監に近藤民之助、岡野弥右衛門が就き、一番小队から七番小队の七小队、五番狙撃隊から八番狙撃隊の四小队、諸隊(神勇、散兵、奇兵、遊撃、無双)の五隊、大砲十二隊(一隊二門)などといった大編成であった。この編成により先発、中軍(本隊)、殿軍の順に松代から出発してゆく。この殿軍に大砲第二司令として宮下欽次郎も従軍している。北征軍の総数は2771名(甲府守備隊も含む)で、領内からは軍夫として数多くの農民も駆り出された。

(森重和雄)